ニュースレター
かけはし
vol.29
2016年7月
アメリカへの学位留学を支援する
米国大学院学生会

目次

寄稿：異文化で患者を診るということ 1-2 (村瀬華子)
寄稿: 雨乞いダンス 3-4 (石松拓人)
連載: 発展途上国への支援。農業？保健？いや、ITでしょ！（後編） 5-6 (狩野剛)
我が街紹介：Davis(Calfornia) 6-8 (長谷川優)
連載: 日米大学比較 —個人的な体験— (3) 8-9 (山田 澄生)

寄稿: 異文化で患者を診るということ

Indiana University Northwest
村瀬　華子

私は現在インディアナ大学ノースウェスト校心理学部でAssitant Professorをしています。専門は依存症の治療と研究です。サウスダコタ大学臨床心理学博士課程で学び、イエール大学医学部精神科にて一年間の臨床研修を修了。その後コロラド州立大学で依存症治療のポスドクをしました。現職場では依存症治療専門のカウンセラーの養成に携わっています。現在は研究と教育が主な仕事内容の私ですが、実はアートセラピスト[1]として働いていた経歴も含めると臨床の仕事をしていた期間の方が長いです。そこで、今回は異国で患者の治療に携わる仕事をするにあたっての苦労と面白さについてお話しします。

Fig 1. イエール大学医学部精神科インターンシップ同期と。今でも連絡を取り合う仲の良いグループでした。（筆者は前列真ん中）

臨床心理士になるには

米国で臨床心理士になるには臨床心理学博士号を取得後、国家試験の合格と働く州の資格取得が必要です。その為、これから漸く国家資格化される日本と違い、米国の心理士は医療、精神医療、教育などの分野で多大なる権力を持ち、尊敬される職業です。それ故にキャリアの選択肢も臨床の仕事だけでなく大学教員、研究者、病院経営、政策を作る仕事などと広がります。そして大学病院で研究しながら患者を治療し、学生指導をするなどこれらの分野の掛け持ちも可能です。臨床心理学博士号には研究と臨床を学ぶPh.D.と臨床のみを学ぶPsy.D.がありますが、特にPh.D.は将来研究職につける、学費のサポートがある、などの理由から有名大学だと30-40倍にもなる社会科学の中で一番競争率が高い分野として知られています。私もこの狭き門を通る為に平日は病院でアートセラピーの仕事をこなし、帰宅後に夜中までGREの勉強をし、週末は研究助手のボランティア、という生活を一年以上続けてやっと晴れて博士課程に入学できました。

博士課程では授業を取る傍、実習を重ねて様々な治療方を学びます。私の学んだ大学院では二年生までは大学内にある学生相談室で実習し、三年生からはそれに加えて地域にある病院やクリニックなどで実習しました。その為、授業を3-4クラス取り、週3-4日実習をしながら修士・博士論文の研究も進める、という過酷なスケジュールが最低でも4年は続きます。そして博士課程最後の1年はインターンシップが待っています。これは医学部の研修(Residency)と似たシステムで、全米にある研修機関から希望のポジションに応募するのですが、学生の数に対して研修のポジションが圧倒的に少ないためこれもまた狭き門です。例えば私が受験した年も応募者の三分の一は不合格でした。この人たちは卒業を一年見送ることになります。更に合格した人たちの56％しかその後の資格申請や就職などに有利な米国心理学学会認定のポジションが取れませんでした。軍病院などは外国人を雇わないので、留学生にはより狭き門となります。インターンシップでは週40時間（場合によっては残業もあります）沢山の患者を治療しつつ指導を受けます。その間に多くの学生は博士論文も書き上げます。無事にこれらを終わらせ卒業し、その後1-2年のポスドクで更に治療を学び（または研究を進め）、国家試験と州の資格試験をパスして、晴れて臨床心理士になれます。

異文化で患者を診る

ここまでの説明で米国で臨床心理士になる難しさは理解して頂けたと思います。しかし、外国人が臨床心理士（及び患者を診る仕事全般）として働くにはそれ以上の苦労と忍耐が伴います。突然ですが、あなたの担当医師が外国人でアクセントのある日本語で話しかけてきたらどう思うでしょう？きっと「この先生きちんと日本語わかるの？学位と資格はどこの国で取ったの？日本人医師と同等の治療ができるくらいの知識と能力があるの？」など不安になるかと思います。治療する側の立場で考えると、ただでさえセラピーに来る患者の多くは心理療法が本当に効くのか多少なりとも疑ったり不安に思っていますので、治療初期段階では患者の信頼を得ることがとても重要なのに、外国人セラピストはアメリカ人セラピストに増して努力しないと信頼を得られません。そして、その努力をしていても「外国人では理解してもらえないと思うから」とセッションの予約の電話をかけただけで断られたり、人種差別などに疎いスーパーバイザーには治療が思った様に進まない度に「外国人だから」と責められたりしました。

アメリカで患者を診る仕事を続けるには、この様な人種・国籍差別にめげずに自分の特徴を細かく理解し、伸ばせる能力は伸ばす努力が必要です。例えば英語のアクセントにしてもIQテストをするときにアメリカ人心理士と私が同じ問題を読んでも英語が聞き取りにくいために患者の答えが変わる、ということが起こってはなりません。また、セラピーでは患者と自分の間にある異文化のギャップを感じさせないレベルの英会話力が必要となります。例えば、黒人患者が「スイカを使った嫌がらせを受けた」[2]と言っていても、黒人がスイカに対して持つ歴史的意味を理解していなければこの患者の怒りや状況の深刻さを瞬時に察知できないでしょう。そして、これでは患者の信頼を失ってしまったり、舐められたりすることもあるのです。この様な文化を理解した上での意思伝達ができる英語を身につける方法はいろいろあるとは思いますが、私はアメリカ文化にどっぷりと浸かれる環境作りが大切だと思っています。友人宅で感謝祭やクリスマスを一緒に過ごしたり、友人の子供の学校の行事に参加したり、アメリカ人ばかりのパーティーに参加したり、とアメリカ人家庭の日常生活を体験するようにしています。また、依存症患者の多くは犯罪歴があるのでアメリカの刑事司法と専門用語は刑事ドラマなどのテレビから学びました。新しい単語や表現方を学んでは、友人の前でその英語を使い、大丈夫だったら患者に使うというステップを踏んでいます。

アメリカ文化や社会の仕組みを理解するのと同じ位重要なのが自分の母国文化や価値観の理解です。人間の行動はその人の考え方に大きく影響されます。そしてその考え方はその人が育った文化や価値観に影響されます。日本育ちの私がアメリカ育ちの人と同じ状況で同じ経験をしても、それをどう感じ、考え、反応するかは全く違う可能性があります。例えば日本人から見たら謙虚な態度もアメリカ人からは自信がないものと見なされるかもしれません。女性や同性愛者の人権保護が進んでいるアメリカに来て初めて自分が持っていた偏見に気づかされることもあるかもしれません。日本人である自己を完全に否定するのではなく、セラピストとして異文化の人を助けるにあたって自分の価値観や偏見の中で障害になっている部分を意識的に修正することが大切になります。

ここまでは苦労の多さと努力の必要性について書きましたが、自分が外国人・少数派民族であることが有利になることもあります。例えば同じ少数派民族の患者の中には白人のセラピストより私の方が人種差別に関する苦労などを理解してくれるから話しやすい、という患者さんも多くもいました。また、私はこの十数年で何百という患者と接してきましたが、私が外国人だからという理由で治療を断られた経験は実は殆どありません。多くのアメリカ人は外国人セラピストに宛てがわれても文句も言わずとりあえず１セッションは来てくれる寛大な人たちです。とはいえ、患者には上記の様に外国人セラピストに対する口に出せない不安があるはずなので、「次回からもこの人に話を聞いてもらいたい」と思ってもらえる効果のあるセラピーをする努力は重要です。アメリカの臨床心理学は資格制度の面でも学術面でも日本より進んでいます。臨床心理学者によって新しい治療法も日々開発されています。アメリカという複雑な文化を理解するだけでなく、自分という人間がどんな人間なのかということも深く見つめる機会も沢山得られるでしょう。そして人種、国籍、文化、言語の壁を乗り越えて理解し合い、共感しあえた患者さん達が希望を取り戻し、回復していく過程に立ち会えるという経験は何物にも代え難いものだと思います。

Fig 2.　インターンシップ中に耳つぼの鍼師の資格を取得したので友人に頼まれて施術中

仲の良い同僚と昼休みに海辺へ散歩へ。筆者は真ん中。
村瀬　華子
インディアナ大学ノースウェスト校

脚注１：　臨床心理学を学ぶ前はアートセラピー（芸術療法）を学び、ワシントンDCにある精神病院で３年間働いていました。
脚注２：　スイカは安くて水分補給に良いなどの理由から、アメリカ南部で奴隷として働いていた黒人が好んで食べた食べ物というステレオタイプがあります。そのため現在でも人種差別目的で使われることがあります。黒人とスイカ、と聞いて意味を察知できなかった方は是非歴史的意味を調べてみてください。この様に「なんで？」と思う様なことを見聞きする度に地道に調べていくことで上に書いた様な異文化間のギャップを感じさせない会話をすることが可能になると思います。

寄稿: 雨乞いダンス

Massachusetts Institute of Technology
石松　拓人

かくして僕は博士となった。留学当初、博士課程に進むことなど1秒も考えなかった僕が、結局7年MITにいて、のらりくらりと博士になり、さらにもう3年MITに居座り続けるのだから人生わからない。最初の7年は、本紙2013年5月号に『○○な話』として掲載いただいたので、今回はその後の3年を中心に、外国人の宇宙就活、永住権申請、ノマドク生活を振り返る。

宙ぶらりん

博士課程が終わる直前、僕はNASAジェット推進研究所（以下JPL）の最終面接に呼ばれた。JPLはNASAの中で唯一外国人の雇用が可能な研究所だが、それでもとりわけ工学の分野では、米国籍も永住権（グリーンカード、以下GC）も持たない人は実質圧倒的に不利だ。そこで僕は人事部に直接連絡し「近々永住権を申請する予定だ」と永住権を「前借り」して、どうにか最終面接まで漕ぎ着けたのだった。最終面接の手応えは確かにあったが、3週間後、セクションマネジャーは電話で僕にこう告げた。「残念ながら現時点で欠員はないが、我々としては君をとても気に入っている。君がGCを取る頃には状況も変わっているかもしれないので、とりあえずstay in touchで」。

何とも微妙な言い方だ。プラスに解釈すれば「自分でGCを取ってくればオファーを出すよ」ということかもしれないし、お決まりの断り文句でやんわりと落とされたのかもしれない。GC申請は、金と時間と労力がかかる。それなりの業績も必要だ。そしてやっとの思いでGCを手に入れても、それがオファーを保証してくれるわけでもない。その宙ぶらりんに耐えられず、自ら明快な進路を選び、去っていった外国人ラボメートも何人かいた。

僕はといえば、幸か不幸か、宙ぶらりんを苦にしない人間だった。僕はGCに挑戦することに決め、その間、同じ研究室に置いてもらうことにした。アドバイザーが「納得の行く進路が見つかるまで、いつまででもいてくれていいから、本当に行きたいところだけ就活をしなさい」と言ってくれたのだ。

家族4人で暮らしたアパートのスカイデッキから、MIT～チャールズ川～ボストンの街が一望できる。

僕には妻と娘がいた。博士課程の終わり頃、妻は育休が明けて娘を連れて東京へ職場復帰していた。が、実はこのときすでに二女を妊娠しており、卒業式が行われる頃には、2回目の産休に突入する算段になっていた。かくして妻と娘は、卒業式の2日前に再渡米し、僕らは卒業後、寮を出てオフキャンパスに家を借りた。そして引っ越した翌日、前駆陣痛が始まり、その2日後、二女は生まれた。出産は前回同様に強烈な体験だったが（『○○な話』参照）面白いもので妻も僕ももう慣れていた。こうしてポスドク＆家族4人生活はどうにか整い、回り出したのだった。

僕のように目立った業績のない人間が、雇用主のスポンサーもなく、自薦でGCを申請する場合、EB2-NIW (National Interest Waiver)というカテゴリーで、自分がアメリカの国益になることを移民局に示さなければならない。僕は何人かの移民弁護士にコンタクトし、最も良心的な価格設定だった女性の弁護士を雇うことにした。彼女から、推薦状をMIT以外から5通集めるよう言われた。集めると言っても、この推薦状はちょっと事情が違う。自分をよく知る身内でもなければ、書く義務も書いて何の得もない人が、移民局に国益をアピールするという非常にレアな文脈なわけで、当然ながら全ての推薦状を自分で下書きする必要がある。その下書きを弁護士や推薦者と何往復かやりとりして修正し、最後に推薦者にサインをもらうわけだ。僕は推薦状の下書き作成に取り掛かった。僕がいかにアメリカの国益になるかという問いに、これまでの業績をベースに大きなストーリーを語らなければならない。これが思いのほか、時間がかかった。僕の業績をバランス良く5通に割り振り、どうにかそれらしいものができあがって、他の申請書類も整った頃には、準備を始めて1年が経っていた。

ノマドク

そうこうするうちに、妻が育休を終え、東京の職場に復帰する日が近付いてきた。彼女が復職するまでに、僕のGCと就職は間に合わなかった。妻と子供たちの帰国に際し、アドバイザーから僕も1ヶ月ほど日本に同行する許可をもらい、家探しや、生活のセットアップ、慣らし保育などをしていた頃、アドバイザーから「次の1年、引き続きMITのポスドクとして、日本に住みながら遠隔で仕事をするのはどうか」という提案を受けた。確かに僕の仕事は理論とコンピュータを用いた計算であり、2週に1度のミーティングはテレコンだ。MITに置いてあるコンピュータへのリモートアクセスも可能だ。つまり僕は、ネット環境さえあれば、そして時差の問題さえ甘受すれば、世界のどこにいてもできる仕事をしていた。僕はありがたくその提案に乗った。東大の客員研究員として本郷キャンパスに個室のオフィスを貸していただけることになり、東大でMITの仕事をするという奇妙なポスドク生活が始まった。僕はこれをノマドク（ノマド＋ポスドク）と名付けた。基本的には東京に在住し、3ヶ月に1度2～3週間のボストン出張をするという生活だ。

僕の事情は少々特殊だが、ノマドクはいかにも現代風の働き方ではないだろうか。夫婦共働きの場合、夫婦の働く土地が必ずしも一致しないことがある。そんなとき、一方の事情に、もう一方がしなやかに対応できるかどうかが、家族としての選択を左右する。そしてそれはこれまで、たいていの場合女性に求められてきたが、我が家では今回は僕がリモートで対応することにより、家族が離れずに済んだ。時間に融通の効く僕が、朝子供を保育園へ送り、家に戻って幾らか家事を済ませて出勤し、夕方子供のお迎えに行くことになった。

このノマドク期間に、僕の論文のひとつがことのほか注目を集めた。MITのトップページに掲載されたことをきっかけに、いくつかインタビューを受け、数百のネット記事が書かれ、中には「MITの科学者のアイデアがNASAに圧倒的勝利」などと煽られ敵対させられたりもした。僕はこのチャンスを利用する手を思い付いた。ボストン出張帰りにロサンゼルスに立ち寄った際、学生時代からのコネを使って、半ば強引にJPLで講演する機会を設け、関連する上層部の方々にも声を掛けたのだ。僕の講演はウケが良かった。その後、上層部の方々とのランチで「近々GCが認可されたらもう一度採用を考えてほしい」と伝えた。

新たな水平線

今年1月、ついに永住権が認可された。申請から1年5ヶ月、待望のGCが手元に届いた。本当に緑色だった。これで堂々と宇宙就活ができる。まずはJPLにコンタクトした。時間はかかったが、僕はGCを携えて、もう一度JPLの門を叩いている。僕がメールを送ったその翌日、JPLのあるグループのマネジャーから電話で話したいとの返事があったので、僕は電話をかけた。電話に出た彼は開口一番、僕にこう告げた。「君に今すぐオファーを出す」。3年前にすでに一通り採用プロセスを経たこと、そして昨年（半ば強引に）トークをしたこともあって、オフィシャルな採用プロセスは全てスキップするとのことだった。予想もしない急展開だった。

いつだか思い出せないくらい昔から夢見てきたNASA。公私にわたって口に出し続けてきたNASA。インターンや就活に何度も挑戦しては突っぱねられてきたNASA。こんなにも長い間、片思いを続けてきた夢が今まさに叶おうとしていた。2週間後、今度は人事から電話があり、正式にオファーレターが届いた。そこには、僕のセクション、グループ、タイトル、給与、福利厚生などが明記されており、2週間以内に返事をするよう記されていた。

3年前のあの言葉を思い出した。「君がGCを取る頃には状況も変わっているかもしれない」。確かに、あのときから状況は大きく変わっていた。JPLではなく、僕の状況がだ。僕は永住権を得ただけでなく、NASAにインパクトを与えるレベルの結果を出した。また、僕の変化は、必ずしもこのオファーを100%喜べる状態に僕を留めていなかった。妻は生き生きと仕事をし、子供たちは良い保育園に巡り合えていた。僕がこのオファーを受けることは、この居心地の良い安定を壊すことを意味し、家族を連れて行くことは、妻が現職を辞めることを意味するのだ。あるいは半永久的に単身赴任をすることになる。夢と家族を天秤に掛けるようなジレンマだ。僕は開始時期と給与の交渉を開始した。とにかく時間を稼ぎたかった。開始時期はできるだけ遅らせて、給与はできるだけ上げておきたかった。ここでは、交渉や並行して行った他の就活の詳細は紙幅の都合上割愛するが、最終的に「開始時期は最大限延ばして9月まで待てる、給与は基本給こそ上げられないが契約金を付ける」との回答だった。僕は、1日待ってもらい、僕の夢、家族のこと、他の就活を経て考えたことなどを思い返し、家族の未来を想像して、そのオファーを承諾することにした。こうして僕の就活は終わった。この選択の果てに何が待ち受けているか今はわからないが、僕は新たな水平線へ向けて舵を切った。

決定力

僕はよく自分のことを「決定力に欠ける」人間だと表現する。ネガティブな意味で使われることの多いこの表現だが、僕は別の意味も込めている。僕には自分を縛る思想や信条がなく、自分を貫く強い意志も慢性的な焦りもなく、何事も「決めずに置ける」性質があるようだ。将棋で言うところの、主導権を握って局面を動かしに行く「先手」ではなく、流れに逆らわず相手の手に乗ってチャンスを待つ「後手」だ。自ら留学をするような人間は、そのほとんどが「先手」だろう。僕も自ら留学した口ではあるから、その血が流れていないわけではない。振り返って見れば、勝負所では先手を取って動いたことも多い。そういう意味では、僕の棋風は「後の先」なのかもしれない。この棋風ゆえに、僕は人の何倍もの時間をかけて自分の夢を叶えたのだが、言い換えると、それはただ、叶うまで同じ夢を見続けただけのことだった。この夢が叶うか否かについて、僕は何も決めずに居続けたのだった。

僕にはすでに次の夢がある。それにいったいどれほどの時間がかかるかはわからない。5年？10年？いや、もっとかもしれない。いつ死んでも悔いのない人生など、どうやら僕には送れないらしい。むしろ、いつ死んでも悔いの残る、常にやりかけの何かを持っている、そんな人生を送りたいとさえ思う。そしてきっとまた僕は、次の雨が降るまで雨乞いのダンスを踊り続けるだろう。相変わらず、性懲りもなく、骨になるまで踊り続けるだろう。

石松拓人
マサチューセッツ工科大学
データ・システム・社会研究所
博士研究員

連載：発展途上国への支援。農業？保健？いや、ITでしょ！（後編）

University of Michigan
狩野　剛

こんにちは。前回は私が「ITと途上国支援（ICT for Development）」を専門にするに至った経緯とバングラデシュ駐在時代の話を紹介させていただきました。今回は「ITと途上国支援」という研究分野について書いてみようと思います。

途上国なのにIT？

さて、みなさんは「ITと途上国支援」と聞いてどのような印象を持つでしょうか？「ITは先進国の話でしょ？」「途上国は農業とか教育の方が重要なんじゃ？ 」といった印象を持つ人が多いのではないでしょうか。もちろん途上国支援の分野では今でも教育・農業・保健といった分野が中心であるのは事実ですし、これらの分野に対するニーズは今でも非常に大きいです 。

そんな中で、私がITを専門にしている理由ですが、「ツール」「すっ飛ばす」「ワクワク」の３つキーワードで説明したいと思います。まず１つ目のキーワードは「ツール」です。これは、ITがあらゆる分野のツールとなりうるということで、例えば、教育×ITでe-Learning、保健×ITで携帯電話を通じた妊産婦への情報提供、そして金融×ITで　モバイル送金、などITは効果的・効率的な発展のための重要なツールになりうる可能性を秘めています。

２点目のキーワードは「すっ飛ばす」です。これは、ITによって、先進国が歩んできた過程をすっ飛ばした経済発展が期待できるということです。例として、アフリカで大成功を収めているモバイル送金を挙げたいと思います。ケニアを中心にサービスを提供するM-PESAという携帯送金サービスがあるのですが、これは、銀行口座がなくてもSMSで送金ができるというサービスです。ユーザ数としては、人口が4500万人のケニアで、なんと2600万人以上（携帯電話保有者の８割近く）が登録して日々の送金に利用しています。つまり、日本が経験してきた、銀行口座開設→窓口送金→ATM銀行振込→モバイル送金という発展の手順を一気にすっ飛ばして、いきなりモバイル送金を始めています。むしろモバイル送金に関して言えば、日本のはるか先を行っています。このように、技術を活用することで、現在の先進国とは全く異なった発展モデルを考えることが可能になってきています。

そして３点目は「ワクワク」です。これは個人的な感情に近いのですが、ITやテクノロジーはワクワクする機会が多くあるということです（私だけ?）。iPhoneなどの電子機器やスマホアプリ、インターネットなどにおいて、日々新しいアイディアを持ったサービスや製品が生まれていて、とてもワクワクすることが多いです。このワクワクすることの楽しみを味わう権利は途上国であろうが誰だって持ってるんじゃないかと思っていますし、そのワクワクが勉強意欲などに繋がり、経済開発の起爆剤の一つとなりうると私は信じています。

私の研究内容

では、ITは途上国支援のツールとして万能でしょうか？それは否です。途上国へのIT導入には賛否があり、失敗しているプロジェクトも数多くあります。例えば、小学校にパソコン教室を作ったものの、勉強に使わずゲームにばかり使われてしまうことや、インターネット経由で先進国の映像などを見ることで、自分たちの物質的な貧しさを認識してしまうということがあります。また、自分自身も時々スマホ中毒だと感じるように、ITが100%良い効果だけではないこともわかっています。では、その中で、どのようにすれば人々の学びたい意識を刺激し、ITの良い面を生かしていけるか、これは私の研究分野のひとつです。

ご参考までに、私の研究プロジェクトをひとつ紹介させていただくと、途上国のITエンジニアの卵（学生・若手エンジニア）の職業観を調査することで、彼らの目指すキャリアや働きたい国・場所などの職業観と、彼らの経済的・社会的背景との因果関係を分析しようとしています。この研究を通じて、その国のIT分野を目指す若手が何を国に期待しているのか、どのような人材育成が最も効果的なのか、といった点を明らかにし、IT人材育成に関する政策提言のようなものができたらいいなと思っています。

Fig.1: 国際色豊かな同級生たち（筆者は後列左から2番目）

情報学大学院

次に、私が所属するミシガン大学情報学大学院 (University of Michigan, School of Information)について紹介させてください。まず、よく聞かれる質問として、「情報科学は工学部（コンピュータ科学）と何が違うの？」というのがあります。私がよく使う説明としては、工学部（コンピュータ科学）は「ITを作る」研究をするところ、私の所属する情報学大学院は「ITを使って社会がどう変わるか」を研究するところ、という言い方をしています。情報学大学院は、歴史を辿ると図書館情報から始まっているのですが、インターネットの発展もあり、最近ではインターネットのサービス、そしてデータ・サイエンスといった方面に急速にシフトしています。

研究の範囲も非常に多岐にわたっていて、多くの研究者がコンピュータ科学、情報科学、経済学、社会学、心理学、文化人類学などの複数の分野にまたがる研究を行っています。私の場合はコンピュータ科学（または情報科学）と国際開発学の分野横断型研究、ということになります。所属する情報学大学院で現在主流な研究分野としてはHCI (Human Computer Interaction)やUX (User Experience)などの人と技術のインターフェースなどの研究、ソーシャル・メディア（FacebookやWikipediaが人の行動をどう変えるかなどの研究）、そしてビッグデータやディープラーニング（機械学習）に代表されるデータ・サイエンスであり、私の研究している「途上国開発におけるIT活用」はややマイノリティです。先ほど書いたように分野が多岐にわたることから、ダイバーシティ（多様性）をテーマの一つにしているようで、私のプログラムの同期のPhD生は14人なのですが、国籍がアメリカ、中国、インド、台湾、ベトナム、シンガポール、イラン、日本と国際生に富んでいます。

Fig2. 美しき五大湖（背中は息子たち）

社会人留学の勧め

最後に、（この読者層では比較的マイノリティ?の）社会人読者向けにメッセージを送ってみたいと思います。私の大学時代には、留学して学びたいなどは思いもしなかったので、高い志を持ってアメリカ留学に来る若い学生は、本当に素晴らしいと思い尊敬しています。その一方で、私は今、こうやって社会人経験を経て得た目的意識を持ってアメリカで勉強をしていますが、「この知識はこの業務で使える！」「こういう理論があったのか」という業務に直結する発見があるため、勉強するモチベーションを保ちやすいです。もちろん宿題や語学の壁で辛いことも多く、「仕事してる方が楽かも・・」と思うことも度々あります。ですが、仕事が多忙のために自己研鑽に時間を割くことができず、悶々としていた過去と比較すると、留学でひたすら時間を自己研鑽のためだけに費やせる今の環境は、「なんと贅沢で幸せなことか！」と強く感じることができています。これは修士過程であろうが博士課程であろうがMBAであろうが同じだと思います。

ですので、明確な目的意識を持っている学部・大学院生の方には「ぜひ来てください」といいたいですが、将来やりたいことが漠然としたまま留学を検討している人は、一度社会に出てみるのも選択肢ではないでしょうか？　社会人を経験して、自分の学びたいことがしっかりわかってからであれば、勉強は本当に楽しいです。「学びの喜びを味わう」といった観点では、私は社会人留学をおすすめしたいです。

狩野 剛
ミシガン大学情報学大学院博士課程1年
http://tsuyoshi-kano.com/

わが街紹介: Davis (California)

University of California - Davis
長谷川　優

大学の紹介

私は現在、University of California-Davis (以下UC Davis)に在籍しています。UC Davisは、California州都であるSacramentoの西側、およびSan Franciscoの北東に位置する、Davisの街にあります。University of Californiaは全部で10校あり、Davis校はその7番目にできた総合大学です。農学校として始まったためか農学系の学部が特に有名で、2015年のQS世界大学ランキングの農林業部門および獣医学部門において第1位を得ています。
キャンパスには東西に横切るサイクリングロードがあり、湖や様々なお花が咲く庭を楽しむことができます。ただキャンパスをのんびりと歩くだけでもたくさんのリスや、たまにノウサギ、トカゲ、タヌキを見ることができ、とても気持ちがよく、良い気分転換になります。

街の様子

Davisは小さな田舎町で、その人口約6万6千人の多くが学生や教員等の大学関係者である、いわゆるカレッジタウンです。大学のキャンパスを囲むように住宅地が広がり、キャンパスの東側のダウンタウンには、若者が遊べる場所はあまりないものの、映画館、カフェ、レストランやバー、それから本屋等が並びます。Davisに住む人々はCaliforniaという土地柄、アジア系アメリカ人や留学生が非常に多く、私の大学院の同期も半分が留学生です。フレンドリーでとても暖かく、留学生にはとても過ごしやすい環境です。街の雰囲気もまた田舎ならではののんびりとしたもので、一番多い犯罪

は自転車泥棒だと言われるほど治安が良い街です。Davisは"The Bicycle Capital of the U.S."と言われており、市にある道路のほとんどに平坦な自転車道があり、駐輪場も街のあちこちに見られます。私も含め学生の多くは自転車に乗って通学し授業のある建物間を移動します。バスも充実しており、中には車でサクラメントから通勤する人もいます

Fig.1: UC Davisのキャンパスの様子

生活

私はUC Davisの事務で働く女性と犬２匹とシェアハウスをしています。キャンパス内には家族連れの大学院生が優先的に住むことができるアパートもありますが、大学院生の多くは、キャンパス外のアパートの一室を借りて住んでいるようです。集団住宅のようなアパート群には、大抵プールやジムが付いており、住民であればいつでも無料で使用できる様になっています。

Davisは田舎なので車がある方が、行動範囲が広がり便利ですが、自転車さえあれば十分に生活することができます。私は学校帰りにTrader Joe'sというスーパーに寄って食材を買って、家に帰ることが多いです。キャンパス内のMeat lab（UC Davis校内にある食肉処理から販売までの実習及び研究をするための施設。新鮮なお肉をキャンパス内で格安で購入できます。）によるMeat saleがあり、新鮮なお肉や卵を買うことができます。また、Amazonを利用してかさばる生活用品を購入することができるため、車がなくとも生活に不自由はしていません。

デイビスには、日本食が手に入る韓国系スーパーがダウンタウンにあったり、車で20分程度かかりますが、サクラメントまで足を延ばすと、日系スーパーがあったりします。そこでは、刺身用の生魚や、日本のシャンプー等の日用品はもちろん、化粧品等も手に入ります。またスーパーの中に小さなダイソーもあり、少しだけ日本の100均商品を手に入れることができます。

週末には、研究室で働くだけではなく、友人と映画を見に行ったり、ご飯を食べに行ったりすることが多いです。また、キャンパスの近くにあるInternational Houseにて、カポエラ、ヨガ、それからスペイン語教室に通っています。どのクラスも週に1回だけで、のんびりと研究や勉強の合間に続けることができ、また幅広い年代の友人を作ることができ、とても楽しいです。

気候

夏はかなり暑く、摂氏40度以上に達します。直射日光がかなり厳しく、皮膚が焼けるのを感じます。そのため長袖を着ている方が逆に涼しいです。サングラスや帽子が必須でしょう。日本とは異なり、年中通して湿度がとても低いため、夏でも日陰に入るとすずしく、また朝晩には気温が低くなります。
冬は雨期にあたります。気温は冬でもあまり寒くなく自転車で通学している間に汗をかくほどです。ダウンを着ている人もいますが、私は日本で買ったスプリングコートと薄めのマフラーのみで一冬越すことができました。

おすすめ

年に一度あるPicnic dayというUC Davisの学祭は欠かせません。一日中パレードやコンサートが行われる他、各学部が、多学部の生徒や一般の市民に向けて、個性的な展示会をします。また、普段することができない経験をすることができます。私のオススメはChemistry departmentによる液体窒素アイスクリーム（特に美味しいわけではないですが、話題性がある）と、Animal Science department主催のヤギ/牛の乳搾り体験です。

土曜日の朝から昼まで、それから水曜日の夜には、Farmer's marketがあります。地元で採れた野菜、お肉、お菓子、それからお花等を購入することができます。水曜日の夜は特におすすめで、生のバンド演奏を聴きながら芝生でピクニックをすることができます。UC Davisの生徒や家族連れでとても賑わいます。

さらに、キャンパスから20分程度車を走らせると、スカイダイビングをすることもできます。私は授業が始まる前に、朝8時から飛びました。北カリフォルニアの広大な山々や畑を見下ろしながら降下するのは怖くもありますが、最高の経験でした。

Davisにはほとんど観光地がありませんが、車で数時間の距離に有名な観光地がいくつもあります。北にはカリフォルニアワインの産地として有名なNapa、西には港町San Francisco、また東には、シエラネバダ山脈の美しい山々があります。それ以外にもDavisの周りには美しいハイキングコースがたくさんあります。

Fig2. California有数のハイキングスポット、Point Reyesの景色

ウェブサイトの紹介

大学院生として海外大学院に進学するには、準備が煩雑で、また必要な情報が手に入りにくく困ることがあると思います。私は、北海道大学農学部で同期だった種田くんと協力して、そんな日本人学生を応援するウェブサイトを開設しました。受験に必要な書類や奨学金について、実際の経験を踏まえてできる限り詳しくまとめました。ぜひ参考にしてみてください。
http://hokudaikaigaigrad.wix.com/support

長谷川　優
カリフォルニア大学デイビス校
食品科学技術大学院

連載: 日米大学比較 —個人的な体験— (3)

学習院大学
山田 澄生

もう大分前になりますが、私がプリンストン大学の学部生のとき、Woodrow Wilson School of Public and International Affairsという政治・政策大学院には大蔵省や通産省(当時)から常に数人の若い官僚の方が留学していました。そのなかの一人が「授業やセミナーで朝から晩までヘゲモニー、ヘゲモニーでうんざりする」と話していたことを思い出します。ちょっとハナモゲラ語のような響きを持つヘゲモニー(地政学)とは、覇権をもっている国家が、不当に威圧(undue　influence)している他の国家に対して、覇権側の価値観を浸透させることをもって権力構造を恒常化するシステムのことを意味するそうです。２００４年の国立大学の法人化とほぼ時を同じくして、日本でも世界大学ランキングというものが新聞テレビ等で報道されるようになって、この言葉の意味を再び考えるようになりました。

資本主義の本場であるアメリカの一部の私立大学が、世界大学ランキングでは圧倒的な強さを示しています。このリストが象徴するヘゲモニーにおいて何の指標を提供しているかという疑問に対して一番わかりやすい答えは、少し乱暴ですが、「お金」でしょう。この 「先立つもの」は、アメリカの有名私立大学のように多くの寄付金を元手としたアグレッシブな資産運営を基にするか、または最近のいくつかのアジアの新興国のように国策の一部としてつぎ込まれた国家予算に起因することが多いようです。一方でヨーロッパや日本のように、社会のシステムが比較的安定しており、かつ高等教育の中枢が公的予算をもって支えられてきた国の大学は、大学ランキングという一次元的な尺度に関しては、結果的には地政学的覇者アメリカの価値観の浸透を受け入れざるを得ないという状況かと思われます。

あたりまえのことですが、大学の質というものは「お金」ではなく、そこにいる教員の質で決まります。教員の質といっても、教員の質を定量化してその足し算をしたり、平均をとることはあまり意味がなく、研究者として確立した個性を持つ人がいるか、そしてその各人が各々の個性を用いて研究者および教育者として最大限に活躍できる場を大学が用意しているか、というごく当たり前の是非で大学の価値は決まるように思えます。たしかにハーバード大学には高い能力を持つ研究者が多く集まっているかもしれません。その一方で、若い研究者の卵にとっては、世界中のどこであっても週に何回か専門性の高い会話を遠慮なくできるmentorとしての卓越した研究者が一人いれば、それ以上に望むことはありません。また、現在いわゆる覇権を持つ大学で盛んに研究されていることが、いまの若者が研究者として成熟するであろう２０年、３０年先の最先端の研究とどのように相関していくかは不明です。これらを鑑みるに、若い人が博士号を取得する大学院およびポスドクのホスト校を選ぶ上で、マスコミが騒ぎ立てる大学ランキングの提供する粗野で雑音にまみれたinformationよりも、自分の知的好奇心の方向性に沿った、よりきめの細かいintelligenceを収集することが、はるかに重要でしょう。

それでは、この(スパイが欲しがる情報という意味での)intelligenceは、どのようにして収集すればいいでしょうか?　まず、自分が興味を持つ分野の国際的なリーダーを何人か探すべきです。そして、その人となりをいろいろな手段を駆使して探るべきです。とくに最近５～１０年の期間にかけて、その人のもとで博士の学生が育っているかをチェックすることは有用でしょう。残念ながら、一般的に良い研究者は、次世代を育てる良い教育者とは限らないからです。次に、ホームページ等でその人の所属する学科に同じ分野の専門家が複数いることを確認するとよいでしょう。これは、まずそこにその分野の有機的に動いているグループがあることを示唆し、さらにはセミナー等の情報交換が活発であることを意味します。また、指導を受けることを目指していった研究者がタイミング悪く他大学に移ってしまう可能性、またはいざ直接会ってみると個人的に反りが合わない可能性をも考えて、指導教官の候補を複数作っておくべきという意味もあります。そして最後に、私自身が効果的で効率的な情報収集になりうると考える、ちょっと正統派ではないかもしれない方法を一つ挙げます。最近は海外からいわゆる

超一流の研究者がよく日本にやってきます。彼らの多くは（もちろん例外はありますが）研究に対する真摯さゆえか、権威主義、覇権主義とはほど遠く、気さくで若い人との会話を厭わない方々です。彼らの来日の機会に、あえて専門分野が自分の興味のある分野とは少しずれているぐらいの人（たとえば、数学の場合ですと、幾何学に興味があるなら代数の研究者）から5分だけ時間をいただいて自分の学問的な興味と志を簡潔に説明したあと、いま世界でこの分野でどういう先生に就いたらいいかと率直にアドバイスを求めることは、もしかしたら、あなたの人生の方向性を１８０度変えるかもしれません。これらの人は、まず国内の大学の教員とはすこし違った角度で物事をみているでしょう。そして洋の東西を問わず、優秀な研究者は、国を超えて、分野を超えて、また世代を超えて、高い志を持つ他の研究者を認識していることが多いように見受けられます。一般的に謙虚で礼儀正しい日本の若者は少なからず気後れするかもしれませんが、このようにして世界の広さ、そして逆説的に「世界の狭さ」を手探りで体感しようとする強い意志は、木片をくちばしにくわえて飛び続ける渡り鳥の本能として、ごく自然で誇りに思うべきものです。

こうやって手にしたかけがえのない情報をあなただけの羅針盤として、若さという不屈のエンジンを頼りに、大海を越えてどこまでも飛んでいってください。健闘を祈ります。

山田 澄生
学習院大学理学部数学科 教授
スタンフォード大学数学科博士

今回の記事が全３回連載の最終回です。
山田先生ありがとうございました！（編集部）

米国大学院学生会 http://gakuiryugaku.net/

【ニュースレター編集部】

石原 圭祐　高野 陽平　辻井 快
佐藤 拓磨　松島 和洋　塚本 翔大

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中！

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。
http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。http://www.facebook.com/gakuiryugaku
こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります！

以前、先生から論文のためのデータがそろってやっと出版（パブリッシュ）作業の1/3、論文を書き上げ提出するのが1/3、そしてレビュープロセスが最後の1/3であると教えられました。先月、初めて論文を提出し、これから（この編集後記を書いている次の日から）二本目を書きだします。僕も卒業まで後1年程となりいよいよ佳境に入ってきたように思います。みなさんも無理せず頑張りましょう！

（辻井）

冬には-20°にまで気温が下がるミシガン州ですが、夏は丁度良い気温で湿度も低く非常に過ごしやすいです。現在は夏休みなので、学部生達がごそっと帰省しゴーストタウン化しているのは否めませんが、ポケモンGOのおかげでキャンパスに少し活気が戻ってきたように思います。気付けば夏休みも半分以上が過ぎてしまいましたが、有意義に活用できるよう気を引き締めて頑張ろうと思います。

（佐藤）

ドレスデンでのポスドク生活ももう４ヶ月が経ちます。夏はほとんど暑い日がなく快適で、エルベ川沿いのビアガーテンで一杯やるのが最高に気持ちがいいものです。のんびりとした生活環境の中、新しいテーマの方向性を考え手を動かしながら思考錯誤しています。（石原）

指導教員がめでたくテニュアを取得し、先月研究室がシカゴに引っ越しました。驚いたことに、研究で使う試薬や大きな装置なども丸ごと運べたので、新天地で特に困ったことはありませんでした。セットアップも滞りなく完了し、新しい環境で研究ができてとてもワクワクしています！

（塚本）

相変わらず新天地でも研究と伴に食の開拓を楽しんでいます。ドイツと言えばソーセージのイメージが強いと思いますが、僕の印象ではカリーヴルストという焼いたソーセージに甘いカレーソースのようなものをかけた料理がポピュラーなようです。ちなみに僕は到着初日、カレーの文字を見て"カレーライス"だと思って注文したらカリーヴルストが出てきて戸惑いました…（高野）